

## ブラジル経済の復元力

いつか見た光景、フランス語の「デジャビュ」のようだが、みんながブラジルはもうダメだとサジを投げたことがある。

80年代半ばの累積債務危機だ。日本企業、とりわけ金融機関の駐在員たちの顔はひきつっていた。投資したおカネが返ってこないという悪夢にさいなまれたからだ。

実際にそうだった。日米をはじめとした先進国の銀行の多くは結局、焦げ付いたおカネの減損処理を強いられた。

その再現なのか。見たくないものを見るような複雑な感覚である。でも危機慣れたこの国は底力がつき、先進国のセーフティ・ネットも格段に進歩した。かつてのような「返せ、返さない」といった“泥試合”は起こらないはずだ。ブラジルの外貨準備高はまだ3600億ドル（2014年）もある。

今年8月にオリンピック・パラリンピックが開かれるブラジルのリオデジャネイロ。山肌にへばりつくように広がる有名な貧民街がある。ファベラである。足を踏み入れるのに勇気がある危険地帯とされ、リオの中でも最も治安が悪い。道は狭く下町の路地のように入り組んでいる。麻薬の温床ともいわれる。

1959年に仏伊ブラジル合作映画「黒いオルフェ」が大ヒットし、アカデミー賞外国語映画賞を授賞したことから、この地区が一躍知られることとなった。市電の運転手と田舎から出てきた娘との悲恋物語で、舞台はファベラだ。

ボサノバの名曲「イパネマの娘」の作詞者でもあるビニシウス・デ・モライスの戯曲を映画化したものだ。

このファベラが文明開化のように様変わりしている。住人の95%がテレビ・冷蔵庫、65%がDVDプレーヤー、48%が洗濯機、12%がコンピューターをそれぞれ保有しているという。少し前の調査だから現在の普及率はもっと高いはずだ。電気が来ていない場所でも「盗電」で確保する知恵者がいて、問題なく生活レベルを向上させているらしい。

ブラジル地理統計院によると、全土の貧困率は1992年に35%、03年に28%だったが、08年には16%に急減した。

主にルラ前大統領が始めた「ボルサ・ファミリア」(家族手当)の効果が大きく、およそ2000万人がその恩恵を受けたといわれる。ボルサ・ファミリアは「子どもを学校に行かせる」ことが支給の条件になっており、貧困解決と教育向上の一石二鳥の効果があった。

ナオミ・キャンベルやジゼルといったトップモデルが履いたことで有名になったブラジル製高級ビーチサンダル「アバイアナス(日本名ハワイアナス)」を履く人も多いというから、ずいぶん変わったものだ。

結構値段が高いので、貧困層には向かないと思われていたが、そんな心配もなく普及したという。サンダルのマーケティングを担当したのが日系人女性であることは知人ぞ知る。

ブラジルの景気低迷がそういう貧しい人たちを苦しめないでほしいと思う。せつかく裕福になり始めたファベラの人たちの雇用を減らし、生活苦から犯罪に走る悪循環を生んでほしくない。

ブラジル経済は低迷が続く。あ

のリーマンショックも乗り切ったのにいったい何が起こったのかと思う。国の政策も悪いが、企業の側も汚職まん延を防げない。中国経済の低迷や資源価格の低下もあり、複合要因というしかない。

15年は3%程度のマイナス成長だし、16年もマイナスが続くとみられている。15年の新車販売台数は30%近い減少が報告されている。

昔ほどではないにせよ、リアル通貨安とインフレ高進が再燃しつつある。これもいつか見た悪夢だ。かつてはこれらが世界を震撼させる債務危機を引き起こした。

最近の相次ぐ反政府デモを見ていて、かつてのブラジルとはどこか異なるような気がする。サッカーW杯や五輪に対し反政府デモが起こることはあり得なかった。

しかし民主主義と自由経済が定着し、国民の「民度」が高まった。貧しかった国民の生活レベルが上がり、彼らが政権にモノ申すのは「当然の反応」といえるかもしれない。

先進国と途上国の分け方のひとつは貧富の格差である。70~80年代に急成長したブラジルの国内で「G7に入れぬのか」といった話題が出たことがある。しかし「貧富の格差が大きい」という理由でうやむやになった。その貧富格差が縮小し、先進国入りを目指すブラジルの将来像はそんなに暗くない。

資源国、農業国としての優位性があるため、転んだまま起き上がれない展開は予測しにくい。ブラジルは本当に大丈夫だろうか、とよく聞かれる。南米初のリオ五輪がひとつの契機になるだろう。

## 孫がみた世界の全景と未来図

「来てうれし、帰ってうれし、ウチの孫」——2014年3月生まれの孫がわが家にやってきた。もうすぐ2歳だ。無邪気に遊んでいるが、ふと、この男の子を見た今の世界はどんな姿に映っているのか、そしてこれからどんな世界とつきあっていくのか初夢風に考えた。この子が生まれたとき、日本は自民党の安倍政権だ。世界では社会主義中国が大国になっている。同じ社会主義のキューバは資本主義アメリカと握手した。イスラム過激派のテロは気になるが、これからどんな「主義」が世界をリードするのか。

◇ ◇ ◇

僕の名前はレオという。まだ片言しか言葉はしゃべれないけど戦乱や窮乏の中に生まれなくてよかった。初めて目にした日本では、シールズという若者集団が「安保法制反対」「戦争法案反対」と叫んでいた。どうやらこの国は軍国主義や独裁主義ではない。デモが自由にできるんだから、いい国に違いない。それならうれしい。

世界でいちばん強いヤツはだれだ。腕力がいちばん強い国はアメリカらしいが、その次はどこなんだ。ロシアも強いけど、お隣の中国のほうが強いぞという人がいる。僕もそう思う。

だって、おもちゃは中国製が多いし、食材だって中国産が氾濫している。GDP（国内総生産）でみた経済力は世界第2位じゃないか。紀元ゼロ年では中国のGDPは世界最大級だったらしいから、つまり復活したんだな。

中国はどんな国なのか、とても興味がわく。日本の10倍以上の世界一の人口があり、核でもミサイルでも何でも持っている。宇宙開

発も一流だ。ただし気に入らないのが、大きな国土を持ちながら南シナ海のスプラトリー諸島に空港をつくり、海側に領土を広げようとしていること。なぜなんだろうね。

僕が生まれたとき、中国はすでに「世界の強国」になっていた。これからは中国の時代がくると子どもなら誰だって思う。大人たちは中国を「新興国」と呼ぶが、僕には途上国扱いが理解できない。子どもにとっては世界最強国家のひとつだ。

でも僕はまだ子どもだ。印象だけで決めつけてはいけない、とパパやおじいちゃんは言うだろう。

大人にならないと理解できない難しい話だけれど、25年前まで共産主義（社会主義はその一段階）という「私有財産の否定」を信奉する国家グループがあった。ところが、そのグループの大半が崩壊し、これに対抗する資本主義グループが勝った。

僕のおじいちゃんは20年前の中国を知っている。東西冷戦が終わった後、中国はようやく外国人旅行者を受け入れ始めた。旅行に参加したおじいちゃんの話では「多くの男女が白シャツと黒ズボン姿で、ホテルや食事も粗末だった。貧しい国の典型に見えた」らしい。

ふーん、資本主義が勝ったなら「中国も一緒に負けたんじゃないの?」と思うけれど、このあとの中国は賢かった。独裁国家の形を変えずに、そのほかは大変身する。新たに市場経済という資本主義の流儀を取り入れたんだ。

中国の政治体制は「社会主義市場経済」というらしい。社会主義は本来、統制経済で動く体制だけど、これを市場経済に切り替えた。

これがもの見事に当たり、わずか20年余りで繁栄をおう歌している。すごいよね。世界最強の政治体制は「社会主義市場経済」かもしれない。

対照的に、経済が疲弊しても社会主義を貫いたキューバは15年にアメリカと国交を回復した。キューバの指導者フィデル・カストロ氏は“粘り勝ち”と思っているだろう。

ひょっとするとキューバも「社会主義市場経済」に移行するかもしれない。硬軟織り交ぜる不思議な統治形態だけど、これが世界で最も活躍している国のやり方だからケチをつけても始まらない。でも中南米で反米社会主義の旗を掲げるベネズエラのような国は、キューバの変身に戸惑っているに違いない。

ほかはあまり関心がないけど、僕らの世代にまで尾を引きそうなのがイスラム過激派のテロだね。イスラム教の人たちは「テロ首謀者のIS（イスラム国）はイスラムではない」と言っているが、これがわからない。勘弁してほしい。

環境問題は今世紀末にはひどいことになりそうだ。僕はまだ生きているかもしれない。北京やニューデリーはPM2.5とかいう深刻な大気汚染で昼でも真っ暗だ。僕なんかぜんそく気味だから大人になってもあそこには行かないよ。

僕はまだ幼少なので「何になりたいの?」と聞かれることはないけれど、そのうち聞かれると思う。おじいちゃんや外交官のような国際人になって世界の政治体制の行方を確かめてほしいみたいだ。

(日本ブラジル中央協会  
常務理事 和田 昌親)

